

『唐土織日本手利』(からおりにほんてきぎ)

寛政十一年(一七九九)九月 並木千柳・中村魚眼作 北新地芝居

※底本に従って表記や改行を行った。文字譜は、とくに必要と思われるもの以外に省略した。

底本・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館(二10-01115)

https://archive.waseda.jp/archive/image-viewer.html?arg={%22subDB_id%22:%2277%22,%22detail_page_id%22:%221:4161%22,%22image_no%22:%221%22,%22kind%22:%220%22}&lang=jp

1才

唐土織日本手利 座本竹本染太夫

されば大領久吉公。其身は肥前名古屋に有て。揚

鷹の勢ひ遠く三韓に及ぼして。不日に三道の数城

を抜。終に王宮を陥れ。太子を生捕奉り。麾下の勇

将加藤正清の家臣飯田角兵衛。同じく岸田判官の家臣

嶋左五郎。軍兵数多従へ。釜山に近き桂林に威義嚴

重に扣ゆれば。三韓の寵臣陳為敬。和義の使節を承はり。

1ウ

衣冠。正しく畏る。飯田角兵衛面を和らげ。此三韓は神功皇后

の征伐以来。我日本の属国に成しに。近来大明に属し無礼

なす段大領の御怒り有て三韓は愚。大明迄も攻崩さんと

諸將の面々。渡海有て破竹の勢ひ。王城を責破り此如く

太子を生捕し所。其方の国王より降参和睦の願ひ。いよく其

趣でござらふと尋る詞に陳為敬。いかにも仰の通り。生捕れし

太子を御帰し下さるに置ては。永く日本の属国たるねき旨。先だつて

2才

加藤正清公へも申入。大領公の御意下る上は。早く太子を御渡し下さる様偏

に願ひ奉ると。低頭すれば嶋左五郎。角兵衛殿。何ぼ陳為敬あの

様にいはばとて。めつたに太子は渡されまい。なぜといはつしやれ。こなたの御主人

正清公蔚山に籠つて。大明の援兵百万騎に攻られ。難義せられた

所を漸に切抜。生捕た此太子渡してしまふた其跡で。降参に違変

が有て貢の使をおこさぬ時は。我々が匍相より。取持召る正清殿。唐迄が

馬鹿にする。よしにせられと。差出る。おのが心に引くらべ。人を疑ふ狐

2ウ

武士。角兵衛は嘲笑うひ。、、それがこなたの馬鹿念。一旦大領の御意を請主人

の計らひ。今と成て違変の成べきか。武名四海に轟き。鬼舎官と唐土

迄もおぢ恐るゝ正清公の詞は金鉄。若誓に背く時は。何時でも攻潰す

は安い事と。勇気をしめす一言に。鳴はしほく頬赤め。差扣ゆれば角兵衛重ねて。太子を渡す其上は。大領へ御礼の使者。早々渡海然るべし。それと差図に軍兵共。太子の手を引連出れば。陳為敬慎んで。有難き信義の計らひ。太子お渡し下さる上は。大領公へ御礼の使。直に渡海の其用意。相図は斯
3才

と懐より取出す火器を投付れば。煙は空に燃くと。たなひくしらせに林のかけ日陰なゝめに長柄傘。長柄の鏝に音楽のしらべ。吹きる清道の旗の手靡く入朝の行烈角兵衛きつと打守り。早速の来使重覺。此上は帰参の上。

万事宜しく計はん。左五郎もいき帰国と。礼有詞に陳為敬。恭礼答礼礼義

国。和義の調ひ万歳と寿く飯田悦はぬ。嶋諸共に。引連て。君子国へと【三重】
帰陣有

式冊目

豎横に町は並ひて四角なる。中丸山の揚屋の内。鉦ちやるめらにらつ。パ笛

3ウ

拍子おかしき大騒き。かんべらすんの。ひやこなんきん。いんけんまめんのすつほらほん。すこゝんこんのひやうほらほん。手拍子揃ふ唐踊りに仲居禿か。さく

きくと。誉る詞も唐近き。廓に馴たる粹詞。盃下に韓柳主。見るを見真

似に此丸山は。女迄が唐音を遣へば。又おいらが仲間日本詞。とかく世界はうらはらじやと。いふに仲居がおつしやる通り。此廓に住者は唐音は愚。紅毛（おらんだ）しやがたら詞でも通じるが馴た一徳。申下官様踊りてさぞやお草臥。酒一つ上らんかと。いへど皆々かぶり振。とらやきんとん。きこらいけん。とうらいく。何じやへ酒

4才

も呑たいけれど。お頭の庭金様か遅い故。迎ひに行ふといはんすのか。ほんに此大将

さんは。高雄様や七浦様を連立て。からそめきなら早からふに。遅いしやないか

韓柳様。遅い段しやない。逢方の七浦迄。連ていかれて迷惑しやと。首筋

長ふのひちゝみ。見やる向ふへ蛮楽の音。春風に吹送るよるへに。靡く柳腰。其

名も高雄七浦か。かいとり棲の八文字。客は異国のかひたん庭金（ていきん）。十木伝七付添

て居ならふ庭は唐物に。日本の花をいけて。盛りを見する風情也。大将庭金機

嫌よく。くはんしへ。てんさんかうちう。申其唐音は取置て。此伝七か通辞いらす

4ウ

座敷へお通りなされませ。然らば和言で呑直そふ。二人の君か浮ぬので。おれ

迄が気がめいる。伝七身共とは一方ならぬ其方故。高雄が事を頼んで置た

に。ふしや。合点。二人共ちとわさくと。とめませに頼むを呑込で。肝心

の馳走役。伴右衛門様か見へぬによつて。七浦様。そふじやはいな。有はいやなり

思ふはならず。しんきな事じやとまぎらかす。韓柳主聞咎め。又しても伴様と。

ひいきする程胸がわるいぞ。色で有ふが虫で有ふが。日本人にこふられては唐人の顔か

立ぬ。よいてや。それ故馳走役なれと。見付次第に多しめる故。頬出し得せぬ伴

5才

右衛門。打やつて皆奥座敷で。韓柳主も騒げくと庭金が。浮れ調子に惣ぐが。

あいとしんかんさん。しんかんさんあんす。いゝしんすうぢうらうちやう。おふでどふもならぬきんにやう。おでどもおてゝども。踊りの中へくろんぼがきよろゝ眼に十木を

見付。ムノ伝七殿。キ伝七。しろ物を売た金突延して斗居すと。今渡して貰はふ

かい。船の出る時。算用して渡そふといふて置に。いやじやはいの。爰に居るお頭の呑込じやとすつぺりたくつて売てしまい。金じやといへば今じや。後じやと。明日籠の荷物を日本へ渡したら直に出船。き今おこせき今請取ふ。ヒキ黒す人が聞はい。

5ウ

何にもかも此庭金が呑込で居るでないかい。いやでござんす。めんよふ伝七がひいきさしやる。もふ大将でもこはふはない金おこさにやいつそのにけ。久吉公の陣屋へいて。何にもかも打はるのじやと。生れの體に覆輪かけ真黒に成て。腹立る。ヤ、そふいへば是非がない。其金は身が渡す。キ、近ふくと。呼れてにつこり立寄黒す。髪の毛掴んでにじり付。さおのいらは。嵩愉鳴の片わきに。穴を掘て住家とし。詞付も分らぬやつを。

船の用に遣はふ為。和言迄を仕込で。鳴のやつらはおれが養ふて置ぞよ。金より先へ仕送つた算用ひろげと蹴り飛ばせば。きゝそりやそふじやけれど。こ

6オ

りや又あんまり。何があんまり。さ下官共。此黒すめを引立て棒くらはせ。早ふ。くにはらくと。棒ふり上て立かゝれば。待てくと眼に溜る。黒い涙を押拭ひ。ハ、いかにわしが黒んぼじや迎。棒でたゝくは傍若無人。国で忍びの入時は。衣装なしに遣ふて置

て。あんまりむごい。ハ、細言はずとキウせいと。いたがる物を用捨なく。打立引立連て行。あたり見廻して。庭金は小声に成。ヒ伝七。今黒すが口ばしらふとした内證荷物。拔売金のきまりはよいかや。ふ何時でも。積込やうに金は隠して置ました。ヤ、よし。先年親父が此長崎で。馴染重ねし傾城に胤をやどさせ。後の證に劔を残し。日本て生れた

6ウ

伝七。兄弟のよしみ万事そなたに任して置。キ、高雄が事も。ふ呑込でおります。ふしぎの縁で名乗合たも。貰ふて置た此劔のお蔭。伴右衛門が邪魔すれど。追付

高雄もお手に入ます。それに付お頼申た。明日荷物引かへの役人菊池亀次郎

様は。拙者が元の御主人。先年此伝七放埒の誤りにて。既に成敗にあふ所を。お助有て此所で無事にくらすも。亀次郎様の親御のお情。其太切。な御子息より。久吉公へさし上る千鳥の香炉。目利の極めは兄者人。ヒガ氣遣ひせまい。そちが恩有亀次郎

亀抹にしてよい物か。然らばいよく。ふよいてや。そんなら何角は又後程。わがみも万事

7オ

頼んたそや。先お出なされませ。唐と日本の云合せ訳はちくらの沖の舟。忍び姿に亀次郎。窺ふ奥より出合頭。さ七浦か。亀次郎様逢たかつたと取すがる涙は深き多にしなり。きゝおれも逢たさに忍んで来たはさつききの舟。韓柳か身請と有文体。ナヤ

それ故心も心ならず。文でしらせにあげたのじやはいな。ヤ、其訳伝七も知て居るか。ヒ。皆伝七左様の差図じやはいな。ヒ伝七が。ヤ、と吐胸にさし込肝積とはしらずして伝七は。何心なく立出るを。十木伝七。恩を忘れし人畜めと。刀の柄に手をかくる

を。しつかと押へ。ううお待なされませ。訳もいはずにお手討とは。う聞へた。こりや七浦
7ウ

殿の事か。きそれじやによつて。きくほど。大恩請た此伝七。思案か有ていたせし事。う、
訳をお聞なされませ。是迄あなたの御放埒。揚やうの滞り。其上に大切な久
吉公よりお預けなされた取かへの産物。質にお入なさらた品。あす迄に取戻さね
は親御様へもかゝる大罪。其金を調へんとさまゝの偽り事。天の恵で漸と金拵へ
て済ましました。其種に成庭金韓柳。身請の事を請合たも。何角の工面に当
座通れ。此間中伝七が。苦しむ胸は御存知有まい。う聞へぬ若旦那と男泣に泣
ければ。う誤つたう伝七そふ聞は皆尤。心遣ひをかけたのは。う了簡してたも。うまだ
8才

此事は云にくいが。久吉公へ差上る香炉をの。う香炉がどふ致しました。き五十両の金
のかほりに才兵衛へ預る所を。伴右衛門が情で金取かへ香炉は暫く渡して置た。う、
それを渡してよい物かと。かけ出しては立戻り。気をもむ伝七立たり居たり。二人も
うろく。大事ないかや。大事ないかへうと思案もとつ置つ。時介参れ。ううと十木が
奴。お旦那。御用でござりますか。う其方は若旦那七浦殿諸共に。いつもの揚屋へ。
明朝荷物引がへの時刻違はずお供致せい。う申若旦那。跡は拙者が胸に有。うお出
とすゝめられ残る案しも若い同士。伝七よきにと時介にいざなはれてぞ
8ウ

出て行。跡見送つて伝七は。伴右衛門が手に入し。香炉を取戻さねば家は断絶うどふしたらよか
らふと。恩と忠義に伝七が。思案片手のたはこ盆。思ひは富士の煙より。空に高雄が

やるせなさ。そつと立出伝七様。そこに何して居やしやんす。是いななせ物をいはしやんせぬ。お前
の云付亀次郎様のお為じやと。伴右衛門づらに心の有様子。仕て見せる情なさ。まだ其上
に庭金が。傍を放れぬ揚話の。いやな有でう請にくいつらい辛抱する事も。皆お前の
教へじやと守つて居るに胴欲な。同じ座敷にゐるけれど物いふ事も尽ならぬ。逢瀬も絶た

女の心。思ひやつてはくれもせず。聞へぬはいな伝七様。余りむごいと取すが。流れの身程真実
9才

に成ては愚痴な物なり。きく其恨は尤。じやが。わかみをおれが訳有事けとられては一大事。もふ
一夜さか二夜さで。気の済やうにする程に。辛抱してたも女房共。う嬉しうござんす。其一言必
かはつて下さんすなど。手を取合てひつたりと抱きつきせぬ契りなり。伝七。十木氏は居召る

かと。つつと通る唐津伴右衛門。はつと高雄が座をはずす。う高雄う、下にゐやいのふ首

だけの伴右衛門。顔見る度にびんくひんくすること道理これじや物。四も五もない伝七高雄を貰ひ
たい。う逢たかつたに伴右衛門殿。成程高雄をやりたいが。庭金殿から手附の渡つた此高雄。おれが
俣にも成まいかい。うう。そつちに言分なけりや毛唐人に貰ふて見せるが。伝七其毛唐人に

9ウ

売てくれいと頼んだ。紅毛作りの劔はとふした。き。うき金もおこさず。劔も戻さず。わりや
恐ろしい者じやな。う預り物に麁相はせぬ。其劔はう愛にと。取出し見せるを引たくり。取戻したら
言分ない。是からは高雄の君。さどこへかはしおつた。う伝七われが其目づかひ。かはさしたな。多い
は。これから又奥へいて。庭金に直相對。うう。伴右衛門殿。ちよつと逢たい。何の用じや。うう

水でもない。亀次郎様がお預けなされた香炉が出して貰ひたい。ウ、香炉がほしくば五十兩爰へ出せ。キ、そこ頼み。明日なければ叶はぬ宝。暫くの内。いやじやくわい。戻さぬは恋の意地。南京船へ売てやるは。ウ、そふいやこつちも火急の入用。香炉は借たと引出すを。やらじとぎしむ伴右衛門。互
10才

にばい合真中より。しつかとつかんたかびたん庭金。ミ五十兩。請取おらふと投付る。ハ、邪魔な所へふつてわいた此金と。ふせうくに立寄唐津。襟がみ掴んでくつと引付。さうぬは高雄が事に付。

よくも恋の妨げひろいだな。其上にまだ高雄をくれいとは。胴より膽の太いこなうづ

虫めがと。握りこぶしのつづけ打。もふ了簡がと刀の柄。さく。きつば廻して何ひろぐ。馳走役の

身を以て手向ひしたらうぬが身の上。きそれは。見事切かよ。きくくこくな大馬鹿め。ハ韓柳

主皆爰へきて打すへい。ミてん手に向ふ見ず。背骨肩骨用捨なく打すへられて伴右衛門。無念

とあせれと手向ひならず。うんと其俣反かへる。ウ、もふよい。是から直に十連寺で。異国の

10ウ

産物引がへの時刻。伝七香炉は目利して。後に渡そと納めた庭金。然らば何角十連寺で。

亀次郎様の首尾万端ふわがみの主ならおれも同然。わるい様にはせぬ程に。高雄が事を頼ぞと恋に読る。鼻の髭。気もおも長に異国風。皆引分れ出て行。日陰は西へ。遠近の入相

告る鐘の声。身にしむ風に気の付唐津。さにつくいかびたんめ。覚へなき無体の打擲。香炉は

取れるやぶれかぶれ。儕其俣置ふかと。以前の劔を引ぬいて打守り。刀で殺さば跡の吟

味。親の譲りでたつた一突。そふじやと劔を引そばめ跡を。したふて【三重】かけり行

三冊目

11才

十連寺の浜籠に床几直させかびたん庭金。荷物積上居ならへは。こなたは菊池亀次郎。引かへの役

目として家来が扣る帳面の。事嚴重に付分る。大人参五万斤の内一櫃。白砂糖廿万斤。鼈

甲が三千枚。枝珊瑚珠五百本。ウ、付札の通り残らず見せ本帳面済だ。仲衆共運べくに籠の

内。下官交しりにどつさくさ。取納むれば亀次郎。庭金公には殊ない御苦労。且は内々御世話の

段。伝七より承り忝ふ存じます。ウ、何事も隠密事。外ならず存じておるはさ。事相濟ば韓柳

諸共当所の役所へ。成程我等も亀次郎殿と御同道仕る。キ、御出と韓柳主。目礼式礼亀次郎。役

所をさして急ぎ行。道引違へ伴右衛門。庭金覚悟とい、かくるを。かいくづつて身構へし。うぬは唐津

伴右衛門。

11ウ

最前の意趣ばらしか。ウ、知た事くたばれと。又突かくるを引はつし。入身に成て腕首掴み。さ此劔は紅

毛物。伝七が所持の劔。さ馬鹿つくすな。これこそは親の譲り金の入用伝七に。売てくれいと渡して

置た異国の名劔。さ何と。是を親の譲りといふわれが素性は。ウ、母は丸山の傾城。父は異国のぶれんて

い高。さくく劔を證拠に伝七と兄弟の名乗をしたが。さ其の弟は伴右衛門われで有たか。そんなら異国

の兄といふはこなたか。ふ思ひかけなき対面と。あきれて。うつとり成斗。戻りか、つて立聞韓柳。さ

伝七めが。劔を證拠に兄弟ごかし。金も荷物もたくりおつたに違ひないぞや。ウ、伴右衛門を寄付ぬと

いひ。さ高雄が事も皆伝七めが仕事じやな。ウ、兄貴。荷物も金も亀次郎が。借錢なしに

12才

しおつたのじや。其上高雄は伝七と。くさり合てゐますはいわいのと。聞より庭金髪逆立。ハ、思へばく

につくい二才め。此上は亀次郎も生ては置ぬ。手をぬらさず殺す思案は此香炉。弟出世の種じやそちにくれる。韓柳主は黒すに云付。七浦高雄を引かたげて。ヒヤ斯々と耳に口。ム伝七めは。此庭金がぶち殺す。出来た。ヒヤ。吹込悪に呑込悪。道は二筋両方へ引わかれてぞ行跡の。浜辺づたひに七浦がこけつ転びつ逃くるを。追付くるすが引とらへ。韓柳主の恋人殿。引かたげて唐唐への欠落。こつちへござれと引立る。此体見付て奴の時助。ヒヤ何ひろぐと投付れば。宙にてひらりと身がるのくろす。直に取付我武者もの。ヒヤ七浦様。此間に早ふ。ムヤ。逃行。とむむる三人が。入まじつたるあらそひに猶も。わけなく【三重】いどみあふ

12ウ

奥庭も美麗を尽す十連寺。風の音さへしめやかに廿日亥中の月

影もほのかにうつる一間の中。名さへ高雄が立姿。裾にもつるゝかびたん庭金。色にあふては余念なく。ヒ高雄どふいふても此髭此と。抱れて寝る気はないかいのふ。ハ、

聞分のない情しらずと引寄るきお志は嬉しいが。今お前に随ふては。男へ立ぬ

か。ハ。ヒ云かはした間夫へ立ぬか。ハ。何もかも知て居る。知ぬいてゐるはいや。斯成からはこつちも意地今帯紐とかさにや腹がいぬと。ぞつこん放さぬほれ

神に。ム待て下さんせいな。待とは抱れて寝る心か。きどふなりと成けれ共

13オ

な。今いふ事をとつくりと。聞て下んせ庭金様廓に住ばわたしでもましは

つま木にあらぬ身の。楽しみなふては勤まらず。其訳立て唐へゆきや。便と

するはおぬしさま。爰の道理を聞分て。今寝る事はゆるしてたべ。やいのと

かきくどく。女心ぞゆるせなき。ハすりや其訳を立てから。帯紐とかふといふ

のじや。キ訳も立ずにお前にあふては。伝七へ立ぬといふのか。ハハハ、異国人は

甘いと見て。うぬらがよつてもくろんだ打手がへ。いやでもおふでも抱て寝る

サおじやにうしやうはな。ハしづとい女めうせあがれと。じりりと付廻せ

13ウ

ば。頭はれたかと気もそぞろ扣る襦袢捨て。庭へ飛おり逃行高雄。俱におり

立。鬼薦の。はいまとはれて放さぬ難義。見るより伝七飛て出。中押わく

れば嬉しさの足もそぞろに逃行。ム高雄と庭金が。行を引留。ム兄

貴。ヤどこへ兄貴。ハ愛な大盗人めが。おのれ伴右衛門が劔を銜て。荷物を取込

某始皆の者迄。よふあげたぶらにひろいだな。ヒ其事を御存じか。ヒ御

存じか。ヒやい大まいの金はたくられ。惚て居る高雄は儕が深間と。聞た

時は五臓六腑はもへ返り。熱い涙がこぼれたはいや。切刻んでも飽たらぬ。大

14オ

盗人め泥棒めと。蹴やり蹴飛し責せつてう。きく御尤じやく。どふで一度は

しれる事と。覚悟しての偽り事も。身の欲にせぬ主人の為。こなたのお蔭

て亀次郎様の。お身さへ立ば取込だ金は。どふして成と此伝七が済します。ヒ申

慈悲じや情じや了簡して。どふぞさつきの香炉を。いやじや。キハお腹立は

道理じやが。けふ中に其香炉がないと。亀次郎様のお身の上を合して

拝ます。偏にお情くと。血を吐思ひの。はらく涙。ハハハ、何じや泣か泣する

の明りを照し。そこかこゝかと二人して。探り当りし片々を。合せはしつくり合ながら。ヒヤ贖物。ヒヤ宝お外にヒヤ忝いと。悦ふ後へ韓柳主。伝七やらぬと取付を。片手につかんで庭先の。目当は井戸へとんぶりの音にまぎれて【三重】落行

17才

四冊目

四なりけり身を筑紫湯様々の。神に歩みを箱崎は海の中道名に高き正八幡の鳥居筋。往来絶せぬ。浦の浪浜を拵ぎの。綱手縄九助といふて此辺に。

年経る松の堅親父に。付てくるわの二人連。ヒ親父。亀次郎といふならず若と欠落した七浦太夫。てつきり親里へ便つて居やうと。はるゝ出かけてそちへ行道。出ぐはしたが幸。

脇道へ引ずらずと内へ連て行ぬかいの。ヒ道々も云通り。内へ逝でも知た出入。娘が居ぬと云にこそ。一昨日から戻つて居ます。キ、そこじやはいの。関破りの大罪人。ちつ共早ふ引

17ウ

ずつて逝る合点。是はしたり。そふ倍高に云ぬ物。一両日待て下さつたら。金拵へて済します。不肖ながら立金で受取て下され。ヒ、成程。虫の入た奉公人。弥夫に違ひがなくなば。あした迄待てやる。夫迄はヒ三助よ。城下へいて泊るかい。ヒ夫がよござりましよ。宿屋の向ひは直にお役所。ほんにヒ。間違ふたら願ひますぞや。ヒ間違ふた其時は。娘を連て逝しやませ。そんなら何角はあすの切刃。違へまいぞと念に念おしを。きかして別れ行。跡見送つて思案顔。内へ連て逝だ時は。亀次郎様の有家も知ると。のつ引ならず一寸遁れ。云延してが当はなし。金が出来ねば娘が難義。ヒ、どふしたらよからふと。案じに胸も関破り

18才

の。科を助てやりたやと。手に持網の目に涙。浜辺伝ひにしほれ行。爰に始末

洪右衛門迎生得格き福人有。何するすべはしらね共惜やほしやに凝かたまり。只取やうな設けをば心。かけての神詣。向ふより来る肝煎風。夫と見かけて。是はヒ洪右衛門様。よふお参りなされます。ヒ、熊鷹屋の爪七殿御参詣じやの。ヒちつと奇妙な奉公人を

頼まれ。人立の所を心がけて見あるきまする。ヒ銀設とは浦山しい。持ぐに追付貧はなし。精出し給へとしはんぼが。教へは気の合熊鷹や。ヒ、何ぼ精出しても。抜て仕まふ

味曾こし世帯。お前の様に金を持。伝授が有ば聞ましましたいと。のぼしかくれば洪右衛門。成程

18ウ

伝授致して進ぜふ。先其元は欲深い下地が有が一徳。恠いと欲と不義理とは町人の智仁勇。幸けふは茶店も休みか。明床なれば銭入ず。緩りとお咄し申そふと。床几にかゝり。

斯で多すてい。ヒ朝起は知た事。万事に心を米味曾薪。油火は消すが徳。扱又家内の喰物は。ヒ三度ゝ粥を焚しやれ。夫も米を真似程入て。重に水を焚心。手前の

家内廿七人に小づかひが老文ならし。汁菜ともに店へわたし。一日に廿七又宛其品々も小遣ひ帳へ付さするが面倒さ。近年止に致したりや。紙墨筆の費行ず。高

て喰さずに置ふと思や済ますは扱。ヒ、ヒ。ヒ夫はきついおきまり。ヒ諸道具の遣

19才

方は名な。ヒ、夫にこそ方便有。させ干傘は云に及ばず。摺子木摺鉢砥石磨臼庖丁類。遣ふ度には目にこそ見へね減物故。彼。路次番の格で。借家中から一日宛。廻り

番に借まする。こけても砂を掴むの譬。捨る物は何にもない。いか様左様。水のなき井戸は梯子の入物。成程。鼠の尾は錐の鞘。藁の切はしびりの呪ひ。奇妙で多すと真顔になり。いふ度々に道の爪七あきれて。詞なかりが。両手を打て熊鷹屋。御工夫感しました。夫に付。今申た奉公人が有さへすりや。百両は慥に設かる。何とお気あたりはござりせんか。云々云注文じやの。されはでござります。去所にあなた19ウ

とはうらはらの銀つかひ。気の大きな旦那めが。是迄に遊女芸子娘仲居尼坊主迄。取かへ引かへ妾宅に仕飽てのへち物好。器量には構はぬ。此度は随分人に優れて。色の黒い女子が有なら世話してくれ。金は百両猿が餅。外に褒美も出まするはづ。

珍な好みじやござりませんか。咄せど騒がぬ洪右衛門。尤其男は。妾宅の悟りを開き味い斗を賞翫と見へる。き段々と吟味して見せませ

れど。是はまた濃鼠くらいじやの。黒けれどこけ茶見る様なのと。支障故障。色がとんと気に入ませぬ。併そいつは元安で直のよい

20オ

しろ物。待しやれや。斯つ。と胸算用。ほしがる病の起り口。くらがり。うしとや。人の見とかめつ。姿斗は振袖にまだ。娘気の跡や先。誰に追るゝ松の風。吹倒さるゝ如くにんりんき。そこに打伏ば。二人は恟り。さ娘の子が目を廻した。女中い。呼生られて。息をつき。どなたかしらんが忝い御介抱。有難ふござりますと。帽子まばゆき顔はくろん坊。わつと驚き洪右衛門。逃んとせひがちやくと思案し。爪七。今咄しの注文に。

其娘は黒過ふか。誠にくつきりと黒い本鳥羽色でござります。是なら

直とまりの上代物。しびいて見やうと傍に奇。お黒様。お前は若い娘

20ウ

の只一人。爰へ何しにお出たへと。問れて語るも。恥しながら。二世も三世もかはらじと。思ひ合たる男めが。村の祭の餅が咽に詰つてつい死で退ました。死ば一所と云かはした。其約束を違へじと。覚悟極て出たれ共。お胎に三月たぐもない身。定て此子も真黒な。

闇より闇に迷ふかと。夫が悲しいくと。成たけ誑しういふ事も。どふづけ涙くり返す。

詞に付込洪右衛門。夫は悪からふ。死で仏の為にはならぬ。其真黒な花の姿を。君傾城に売てなと亡人の追善供養。じやと云て私が様な黒い者を。黒いを見込

込にほしがる所は山々。爪七。左様。色の黒いは七難即滅。死で花実咲ま

21オ

せぬぞや。成程。金にさへ成事ならどふなり共致ませう。相談か出来かると。立寄爪七洪右が押留。我弁舌ですゝめた娘。おれが買て直売する。口銭取て世話仕やと。付退れば。そりやお前余り無理な。義理構はぬが町人の智仁勇じや。娘通例なれば半季三拾でも高けれと。

妾と有ば気を張て金子壱両今渡すと。首にかけたる財布より。金取出し

差置ば。娘はむつとし。一両や二両のはした金なら。やつぱり殺して下さんせ。申く洪右衛門様ちよつとと連て追。直に百両になる代物。機嫌損なふては取戻しかなり

21ウ

よい。扱夫からが伝授事。さぐり一盃にたき詰るのしやぞや。何云じやんすやらそ
24才

りやご茶の事で有ふかな。ふ煎じるも焚も同じ理合。さく其梧でやつたが
よい。併生妻は入まいと。初女夫気の指図顔。さくくの女房ふり訳のないのか。花
なれや。いきせき道を磯辺伝ひ。網引提て戻る親父。是はしたり旦那殿。そ
りやご何をなされます。人目も構はず、お袋みなされませ。きせめての助手
見ていた通り。つい此藁を打た斗き、夫がやつぱり入ぬお世話。同じ所を其様に打切
ては。ごみになる斗で役に立ぬ骨折損。娘も娘じや。さなせお留申さぬと。云つゝ
上る破れ畳。塵をひねつて七浦か。私もお留申たけれど世話に成が気の毒など。

24ウ

仕馴ぬ業もお前へ気兼。まだぬかすかい。大事のあなたにしんどさせ。ぞへく廊
風。ハ、埒明ずめと呵り付けば。ム、七浦も留守の内。食物を拵へると。手
づから洗ふが。火を焚が。精出して居やりました。ム、そりやまだしもじや。やおれも
何ぞ上たいと。磯打に往て取て来た此いな。出世魚といやあなたへ起縁親父
が焼て上ませふ。さどふやらめつたにさ焦くさいと。ニ云内ぱちく鳴出す釜。
なむ三宝荒神様の機嫌いかと立上り。あた蓋取て是は又情ない。黒く
すばりじやと引ぬく釜の底はこつくり。ム、しもた。ささ五六百めに成たはいの。さく

25才

何にもして貰ふまいぞや。併娘が仕かけた此中の。実が授たとは是も起縁じや。
催促しをる親方の。見抜したとは目出たい。さ目出たい次手に此親が。娘は
元より亀次郎様。折入て無心が有。何と聞て下さるか。改つたる詞の念。さ
斯して居れば何角とも。頼まにやならぬ亀次郎。ム。もふ逆様な御用でも。
背かぬが娘の役。ム、出かした。忝いと。立て納戸をこてとさがして取出す。

皮柄の。脇指ぼつ込傍に寄。此九助めも其昔は。武士の食くた印の一腰。
今改ていふ事を。よふ聞分て下さりませへ。丸山の騒動より立退た伝七殿が。

25ウ

宝の詮義して来る内。お匿ひ申てくれと。奴殿から委細の頼み。心得たと請合
て。けふで三日夜の目も寝ずに思案の切刃。亀次郎様。申にくいが。ご娘に隙を
やつて下さりませ。さ娘我も旦那を思ひ切。とぼつかり云出す詞に恚り。さ七浦
を縁切て。退て仕まへと云しやんすか。夫は何故どふした訳。何ぼふ親のかうけじや迎
いやじやくいやでござんす。是斗は。云さしてそるに。涙ぐむ斗。きく訳と云
たら浮世の義理。さ若旦那よふお聞なされませへ。伝七殿が人殺しの元はといへば。交易の
産物を質にお入なされたから。是も皆娘故。御家老の若旦那が。見る影もない親仁か内へ
26才

かゝり人。何とご無念にはござりませんか。是迄段々内證の。お世話にも成た御恩送り。譬
命の御用でも立兼ね。親仁なれど。あれ見い。亀次郎を引込だは。娘の蔭で後の栄
花。欲心故と御指さされるが。口惜い。さ申親御へ孝行。お家の為。思ひ切て下さり
ませ。さ又娘もあなたがいとしけりや。離れるがやつぱり心中。そなたが曲輪へ逝

さへすりや。親方も得心。関破りの科も遁れる。さき聞分て。追てくれと。律義。一遍何遍もくり返したる実心に。答へは何と七浦が。と様の御異見を。無理とは更し。思はねど。そも突出しの始より紋日くも常の日も。外のお客の顔しらず

26ウ

ほんの女夫の心いきあかし。暮したけふとなり。今の難義も私故。見捨て何と退れふぞお年寄れたと様。に。苦に苦をかけるは。悲しいが勤する身は只さへも。偽り多きうかれ女と人の誇りは裏表。殿御一人を立通す誠は。廓に限る事。

お邪魔にならば今爰で。いつそ殺して下さんせと恋と義理とを一筋に思ひ詰たる。わりなきよ。思案極めて亀次郎。そふじや不忠不孝も我と我。身から出したる刃の錆。人に苦勞をかけふより。伝七が科を引受。名乗て出るが言訳ぞ。と早かけ出す佐相に。九助は取付、待しやませく。色々申もお為故。お前に若

27才

もの事が有て。伝七殿へ立物かい。じやといふて七浦に。別れては何楽しみ。キ、ようござります。夫程迄におつしやる事なら。娘も短氣を出しをるな。そんならやつぱり御一所に。ふもふ斯成たら。しよ事がない。嬉しやと若い同士。心落付折も折。あるきがひよつこり表から。九助殿。追付御家老菊地様が。八幡様へ御代参。店の掃除は廻り番。こなたの役じや。早ふくと云捨行。親人の御社参とや。さお通りかとうる付二人。扱親御様でも附々に。見咎られては大事のお身。納戸へ忍んでござりませと。指図もそこ門さひ寄掃除に心。いそき行。

27ウ

亀次郎は身を悔み。現在父のお顔さへ拜れぬ世の成行。下部に迄も逃かくれ頼出しならぬ親の罰。御赦されてと合ず手に涙は同じ七浦が。お目見へもせぬ私さへ。お顔が見たふ思ふ物。あなたは嘸と心根を察しやつらる託ち言。早程もなく人払ひ。

先手の足並見やれど心憚りて是非も納戸へ立忍ぶ。実一国を取捌く慈悲は夫と乗物も。権威を見せぬ供廻り。ひそやかに行かゝる先へ廻つて七浦が。こはくながら。お願ひと手をつかゆれば徒士の者。御社参の御供先。願ひ有ば屋敷へ参れ。勝手しらぬ旅の者。お見かけ申て。ひそかのお願ひ。さ女の思ひ有

28才

免すれば聞分ぬ不礼者。下れくと荒立家来。旅の女が願ひとは子細ぞ有ん乗物立よ。ことかたへに昇居れば。内より菊地十太夫六十に近き年栄も。

親子のしるし彼人に似たと思へば七浦が。見る目も涙諸共に。顔をながめて叩へゐる。こなたは夫と気も付ず。挟箱に腰打かけ。願ひと有は其方よな。賤しからぬ爪はづれ。何事成ぞと和らかに。尋られては。猶おづく。憚り多き事ながら。暫の内お供廻りを。遠ざけくれとは密事ならん。我達は松陰にて。暫時が間相待居よ。行くと人を除。き女願ひとは何事なるぞ。有難いお詞。私共は夫婦づれの俄旅人。何をあだての用意もなく。詮方尽し此お願ひ。一つ二つの所持の品。お求めなされ下さらばお情お慈悲とさし出す。紗帛包を手に取上。開

28ウ

開

けば内に覚への小柄。こころに驚きしが。うゝと亀次郎と云かはせし。其女かと打守り。見やる藁屋に我子の顔。扱はと胸にこたへしが。ま身が定紋の此小柄が売たいとな。さ憎い小柄め。太切な役目を仕損じ。大領へさし上る。香炉を失ひ刺。家来の者へは難義をかけ。逃隠るゝ不所存者。こゝやい。一家中の上に立て。国の政事を取捌く。十太夫が所持の小柄に。不忠不孝の錆が有ては。武家の道具
29才

に成ふかやう。少しやり共侍の性根が有ば。行衛なき伝七に尋ね逢。宝を詮義仕出して帰参を願ふ心はなく。領分に身を隠すは。色に迷ふ嘘気者。見付次第まつ二つと。思ふは武士の表役。鮫の柄に放れ。真此如く小柄斗。狼狽ておらふ物と思へば寝ざめが。苦しきぞや。女中。我強ふは云物の。夫の為に恥を捨。小柄を買ってくれいとは。しほらしい心じやのふ。今迄は此小柄を。なまくら物にした傾城め。とき恨んだも小柄が可愛さ。此上逆も。気を付て。頼むと斗目に浮む。

涙無常の親心。其お詞を聞上は。せめては一目親子御の御対面をと

29ウ

立上るを。顔合しては。刀の手前見通しならず。小柄よ。きよつく聞。せつなる義理に引され。情をかけてとめ置はん。さすが賤き百姓の。

すゝめに大事を忘れたな。相役共に見付出され。縄目の恥に一家一門。親

迄恥辱を取さするか。さにつくいやつと不便さの。あまりて老の。涙ぞや。戻かつて

窺ふ九助。つかうと出て膝つつかけ。申御家老様。情をかけてとめ置は。遺

賤しき百姓とは誰が事。そんなきたない根性さげる親仁めじや。ござりませんぞ。

さ娘。今のを聞たか。今のを。わつつくどいつ云たは爰。おりや口惜ふてなら

30才

ぬはやい。旦那を思ひ切といや。死るとぬかすが悲しさに。夫なりに済したが。是非に及ばぬ。潔ふ死でくれ。此脇差で。とつき付て。あたり眼の頬当

も。子を殺そふと刃物迄。のけて置たは何事と。思ふ色目をかくす親。娘

もわつと泣出し。親ひとり子一人の。縁さへ。遠い廓育ち。いつにつしりとと

様に。孝行つくした事もなく。心づかひの数々とかける私は不孝者。死るがせ

めてお気休め。申よふ覚悟しておりますはいな。夫でこそおれが子

じや。出かしたくく出かしたな。隙取程さげしまるぞよ。きく早ふといらつ

30ウ

親出るに知られぬ亀次郎。死ば一所の腰刀。見付る九助が。そりや

何事。伝七殿があれ程迄。艱難する心ざし。あだにして。犬死するのかい。又娘が

最期を見捨にするも。天地の内に忠と孝と義理との三つ。立て下さ

れ。旦那殿。娘。親が心を立さしてくれ。とはいふ物の女業。死

そこなふては恥の恥。いつそおれがと引ぬく刃。様。待て下さんせ

くく。今際に一目お顔がと。かけ行娘を引戻し。道理じや。くく尤じや。

が爰にゐる旦那なら。暇乞もさせふけれど。爰にはござらぬ。思ひ

31才

切て。死でくれ。夫でもたつた夫一度。ハ、キキならぬぞ〜〜〜と付廻せし。

南無と一声振上る刀をしつかと十太夫。殺すには及ばぬ暫く待。キ〜。

根が賤しい百性の。魂を。見せまするはい。キキ我子なり連下々の。気

俣に人は殺されまい。去ながら此刀は。武士も及ばぬ信義の銘作。十太夫が

所望致す。価はそれと投やる一通。子細有んと押開けば。キキ娘

が年季證文。キ其文言をとくと読。キ嫁が見抜の其證文。

宝詮義に二人連。難義の家来に追付よと。明て見せたる底意の一

31ウ

札。キ、そふとはしらず恨んだは。やつはり生れの下主根性。キ。貞女義心の

操。返つて心恥しい。表を立る侍も。子に迷ふ心は一つ。殺そふとするも子が可

愛さ。助るも又子が可愛さ。泣も。怒る義理と義理手に手を取て

親々が胸のあいやけ。打とけし涙に。上下なかりける時刻移れば下部共。早御立

と窺へば。何気泣目を押包み。キ九助。刀の代金廿兩。路用にせよと目で

おしへ人目を防ぐ乗物へ移る御家老。随分御無事で。ござつてと。跡は詞も七

浦が伏拝。みたる暇乞。納戸の内と乗物の内にたゞへる血脉の涙。隔つ親子

32オ

の【三重】別れ道。烈を正して行過る。跡見送つて。三人が歎き。伏たる。浪打際ぬつと出たる

黒坊。さ科人の亀次郎。爰にゐるとは水入して海の底から見て置た。引く、

つて丸山のかびたん屋敷へ連て行きうせいと立かゝるを。どっこいさせぬと九介

が楯。入交つたる争ひも。かよはき二人老人の心。はやれどあやうき折から。遠目に見

付る時介が。走り付より引退る。其手に取付黒坊掴んで向ふへ投込汐先。キ、

キ、よい所へ時介殿。しかしあいつは海が得物。ほんにな。拍子にかゝつて取

にがした。キ、今参る道親旦那のお目にかゝつて。お二人をお供して立のけと。

32ウ

内意受たる此奴め。片時も早く御用意と。すゝめを菊地亀次郎。

伝七が行先は慥に上方是より出立。そんならお越なされますか。娘も必

ず。怪我せぬやう。キ、お前も無事でと暇乞さへそこに。心を

付る路用の金。是も則ち親御の恵み肌にしつかり時介が。キ、御立と引

添たり。又も飛出る黒坊そふはさせぬと組付を。今度ぬからぬ陸料理。

振廻されて目玉のくろんぼとんぼう返り。邪魔を生どる九助が

手練。ざんぶり打こむあみの目をもれて。三人は【三重】おちてゆく

33オ

五冊目

豊なる。治世の時に大籠谷。印南殿の御菩提所大栄寺と聞へしは古へ伽藍

の霊場も近比破壊しすたれしを。国に道有車路や和田知郷左衛門と聞へたる。陣屋

の武士の取立にて本堂客殿庫裏方丈。大門迄も建■ひけふぞ供養と

参詣の。群集は絶間なかりけり。馬場先通り一群に。六庫明石の信心者。巡礼

哥の踊婆。鉦はりちらして八九人。参ると出ると妙輪坊。幟てん手に寄近の箱。

用意の弁当俱に行合。是は扱お講中。けふの供養で台所は上を下。漸お茶所で
33ウ

動きの雑用。今朝卯の刻から白煎詰。鷲の首程長ふひて待て居たに。皆遅い
出よふじやな。さもふ隣のお閑様。向ひのお早様迄がもうじやくとおだてゝなれど。隠
居屋敷の遊長様。其奥のおぬる様。埒が明いで遅ふは成。踊詠哥で道は隙取。き隙
取次手に此お寺の御普請。いつ出来る事しややらと思ひの外。郷左衛門様といふ智恵者
が有て。お殿様に金も出させず。百性もいぢらずお寺も実入のよい工夫で。急に普
請の手が放れてけふの供養。ミ。勘九郎のお云やる通りじや。此国は跡へ廻し五畿内
五ヶ国其外の大国へ。寄進を願ふて急ぎ寄た寄金で。い、あの様に結構な御普

34才

請是を思へは日本程。銭金の沢山な国は唐にも。有やせまい■ふ世界の宝を日本へ
持込故に跡は明からてんしやによつて唐といふ謂がしれたと。高笑ひ。ミ其様に
笑ふまい。面々の腹がからに成きこざれと妙輪に。せり立られて勸化婆。皆一連
に。出て行。跡に残るは鼻の下。寄進の荷物か伸欠ひ。い、我物くふて仏の尻持
こちとはいつそ田楽てなと一ばいやろかい。そんなら此箱爰に置。お性根入て追付に
そふじやくと黙頭合。二人は出茶屋へ行間もなく。供養の終り鉦はる音。下向の
大勢又一群。旅装束にて伴右衛門供をも連ず只一人人立多き所く伝七高雄を

34ウ

見出され。鶉の目鷹の目今味の手配り。笠■けて行過る。今来し道の馬場
先口。俄に騒く人煙り。参りの群集が押合へし合立騒く。伴右衛門立留り。い
心得ぬあの騒き。今通る迄何事もなかりしが。手筈の族か若彼二人を見
付しか心ならずと立戻る。透もあらせず下役人。走くるより手をつかへ。お尋の
伝七高雄。小坂口より付出し馬場先にて追取巻。搦捕んと存てしに。手■
く偏に手に廻らず。早く御出下されよと。いはせも立ずい、手ぬるい。連たる女を
ばい取て面得さすれば籠の鳥生捕に手間隙入ず。い某かと伴右衛門。勢ひ

35才

込で引連行。程もあらせすい。ありやく抜た今切たと。はしる参詣あはてる
道者。見る目もいとはず欠くる高雄。虎口を遁れ。爰かしこ。隠れ家尋る以前の
箱。是幸と押明て。あた蓋ばつたり。身を忍ふ。折から終る法事の役人。印
南の家中郷左衛門麻上下に大小も。古格を守る正しき人品供人連て下向道送る
寺僧が。今日は御苦労ぞふと辞義たつばい。互の目礼謝し終り。歩む向ふに数
多の人声。何事やらんと見廻す目先。箱に挟まる高雄が帯。不審立寄
明る蓋。忍ぶ女は扱こそと。家来が見る目に蓋しつかり。いけしからぬ騒動。

35ウ

参詣の口論か。狼藉者がおはれしか。何にもせよ見捨かたし。家来共。何かは隠密身
か屋敷へ。箱は暫らく預り申。住寺へ其義宜しくと。寺僧に届け手の者に。箱をかゝ
せて郷左衛門。見捨ぬ情下向道思案。とりく【三重】立帰る。忠と義と信を違へぬ表門。
孝と情の裏門もさす大小の釣合に。五常を守る武家屋敷。主は和田知郷左衛門

勤仕の留主は女房が。操正しく姑の身のいたはりを健やかに。誠有ける気扱ひ。物しづかに一間を立出。ヒヤ下部共庭の掃除か太義じやな。知通り母様のおしつらひ。

若お氣にでもさはつては御病氣の為あしからふ。大体に仕まふたら休んでたもと下々に。

36才

情は常の人遣ひ。はつといふのも声びくに。たんのうしてぞ入にける。奥には母のしはぶき声。いと苦しげに聞ゆれば。又お咳が氣の毒やと。ひらく襖の。明くれも。限り有身の膈病ひ。勞れながらも氣精の母。嫁女もふよごさる。長の病氣の介抱も。嘸かしほつと仕やらふに。万事に付ての心づかひ。嬉しうござる過分と。礼の詞も日頃の行義。是は勿体ない。御介抱は嫁の役。いつも其様挨拶はめいわくに存じます。しかしけふはお心よいやらお顔持も見直した。我夫も長の御役目。御菩提所の造営に。則けふがおわたましの吉日。既てお歸り。母様の御氣色よいを御らふじたら。悦びでござりませふ。お目出たやとぞいさめける。主

36ウ

の難義におのが身も爰ぞ大事の時介が。心当途の門の外。見入て。さちとお頼申ませう。下郎めは九嶋より後室様へお使にまかつた者。お取次と云入る。九嶋よりの使とは母様の御生国。苦しうない是へ通りや。御免下さりませと。いふも氣のせく奴らさ。飛石三つ四つ大またげ。剃下あたまた土にうつ付。下郎めは此お屋敷の後室様の生れ故郷。則御子息伝七様のと。いふをこなたに聞取母。そそな者。不通にやつた我子より使とは馴々しい。嫁の聞前主は作行。思はくもある物と遠慮がち成詞推し。それそれはあんまりおかたい母様。珍らしい国物語りも。お氣慰みに成そな事。お使心置なふお咄しなされ其間にお茶あたゝめてと。氣転は跡

37才

の勝手口入間待かねすり寄て。何を隠そふ其お子の伝七様が一世の御難儀。其子細と申まするは。此度渡りし異国人。十連寺を旅館とすればすべて九嶋の御采配。榮耀にはちけて無法のふるまひ。手詰のせつはに伝七様。異国人を真二つ。それからおこる彼地の騒動。伝七は腹切たか。其義は宝詮義の為。此上方へ登ると有て。腹も得切らず出奔したとな。足手まとひの女中をつれ。お立退なされし故此

下郎めはお宅へ歸り。御内宝おりく様。二人の子達をしるべに預け。旦那の古主

亀次郎様のお供して登る所へ。国の役人唐津伴右衛門といふやつ追手に登則今朝

37ウ

旦那を見付。召捕んといたせしを劍術手練の伝七様。切抜はなされしかど。連の女中もちりに。お行衛知ずと所の風聞。お願ひと申は爰。此お館の旦那には。仁義を守る御方と聞たは地獄で仏を頼み。伝七様とは行合兄弟。力と成て下さる様。後宝様から斯々とお願ひなされて下さりませ。此義を申上たきに。参りましたと始から。主の終りを氣にかけて頼む忠義ぞ。殊勝なる。母はつくく聞とゞめ。思へば持べき物は子といへど。又持ましきも子供じやな。指を折ば廿七年。実子をもふけ二つの年夫には死別れ。親の諫に其子をば。養子にやつて生別れ。此国へ来て此家へ

38才

ふしぎの縁の乳母奉公。育る水子も片親の爺様斗の孤子を。身につまされて太切に養育するを見込れて。一家へ披露殿様へ届けも済で本妻に引上られし後の連

合。心に色香はなけれ共。義理につながる二度の縁。今物頭の後宝と。敬るゝも血を分ぬ。我子は仁義正しい武士。血を分た子は人を殺し。腹も得切らず逃隠れ。

命をおしむ億病者の。力と成て下されとは。いはれふ物か頼まれふかよしそれはいふにもせよ。掟を背く科人が。乳兄弟じやと沙汰有ては。郷左衛門が武士が立ぬ。

二つの年別れてよりついに顔さへ見しらねと。今改めて勘当じや。ハ、情ない恥

38ウ

しらずと。はらく涙の。いかり声。ヤ、御尤だゝは。しかし旦那の御比怯は。古主のお家宝の詮義を。まだゝ偽り者。忠義の為に立退者が。足手まとひの女を連。うろ

たへ歩行いてよい者か。儕とても不通の屋敷へ。頼にきたうろん者。きりく帰れ行おらぬか。ヤ、それは。意地ばらは下部共。ム、擲出せ追出せと。詞するどき夕間暮かく

す涙は引立る。寝間の褥や。朽ぬらん。ム、ム、申く後宝様。そりや余り胴欲だ。お胴欲でござりますはいのふ。あなたに逢たら旦那殿の。お為に成ふと楽しんで。結句下郎がおしらせ申。御勘当させましては。旦那に逢て何といはふ。何と申ま

39オ

せうぞいのふ。ハ、聞へた。今のお詞頼に来たうろん者とは。扱は下郎をお疑ひ。敵の手より廻し者と。思し召てかそふだゝはい。どちらへしても此奴が。こりや生てをる場所だないわい。ム、思案の諸肌ぬぎ。段平すらりと引抜て。突込用意持た奴殿。犬死するの。ヤ、

あなたは当家の奥方様。今死るを犬死とはな。き我夫へ願ふてやらふ。ハ、ム、最前から申た義を。不遠慮ながら聞きました。肉身のお子の事。心の内は御不便の涙も義理の表向。わしが願ふて伝七様の。力に頼むは夫の気性。人の難義を見捨る

様な。旦那殿じやないわいのふ。さ有難いお志。然らば下郎は是より直に。伝七

39ウ

様のお行衛を。成程尋ねてお供仕らふ。人の見ぬ内き早ふと。いふもひそめ

く表より。内は白木の荷ひ箱。家来が昇込。座敷の上。旦那にも只今お帰り。太切成調度の此箱。お請取下さりませ。ム、太義で有た休息仕や。ム、奴殿表門は夫

のお帰り。くれに紛れて裏門から。さ。奥様万事宜敷と頼人より頼まるゝ。胸に時つく入相の鐘におはれて出行跡。待間に程も。内玄関より直に通る主郷左衛門。

いつくよりもけふは猶内入のよき。柔和の顔色。只今お帰りなされたか。ム、母人にも御機嫌よいか。ム、お窺ひ申さんと。入んとすれば。ム、申。今すやくとおしづまり。ム、御休

40オ

足遊ばしませ。嘸今日はお寺へも。下々の参詣群集。別戸殿様もお成と有は定て万事お心遣ひ。ミン、長々の御普請成就の上。今日の仏。事迄首尾能相濟身の大慶。御ほうひの御意を蒙り罷帰つた。それは何よりお嬉しや。私迎もお帰りの御機嫌により。密々にお咄し申事が有。ミ、密にとは何かく。き申それはな。ム、扱遠慮なく咄しやれといと睦ましく打とけし夫婦が中へ。お使者也といひ次声。申我妻。お帰りの程もなく。又殿様のお使者とは。いか様合点行ね共。そなたは勝手へもふけの用意。身は出向ひと立上る間もな

40ウ

く。お弓頭白矧矢五兵衛行年七十屈せぬ五調。拝領の呉服新上下。糊ごは成武辺

者。床脇にむずと座し。貴殿此度。大栄寺造営の取計らひ。私なき勤方。殿にも御
悦喜浅からず。御加増は追ての沙汰。今日よりは御家老格。一郡の政道仰付らるゝ。有かたく
お請有と述にける。ミ、不肖の我等お目鏡に叶ひ。大役を蒙る段恐れ入奉る。しかし
お請の義は所存有は。暫くと用捨を願ひ。勝手口に打向ひ。女房是へと呼出せば。

ミと返事もしとやかに。夫の前に手を突は。矢五兵衛殿お越有しは。今日より。一郡の支配
仰付らるべきと。有がたき殿の御上意。お身も満足去ながら。大切成政事の役目。依怙
ひいきの沙汰有ては。主君の御目を掠める斗か。一郡の歎きなれ共。或は女の縁に引れ
41才

左様の義も俣有ならひ。此後何事にても。善悪共に差出まい。構ふまいとその心が定
まらねばお請申されぬ。軽い様で重い事。胸をすへて返答仕やれ。ミ御念過たお尋。矢五
兵衛様のお聞有に。日頃詞ももごうかと思し召も恥しい。あなたの御身には出世のお使者。
有がたふお請遊ばせ。ミそふでない。弥万事構ふまい。差出まいといふ心底ならば。天神地祇
を始とし。あらゆる仏壇先祖の靈。ミ誓言立いとおつしやるのか。其お詞が私が誓
露程も背くまい。■仰々しいかためやと。溜息つぐも媚かし。ミ、御念入たる郷左殿の心底。
奥方の迷惑がり。日頃の潔白斯も有ふ。ミ頼もしう存る。弥今日より政事のお役目。

41ウ

今一役大切成内意の御用。ミ此程十連寺の騒動。異国人を討て立退し十木
伝七。女を召連当国へ入込しを。九嶋の役人唐津伴右衛門。漸夜前加古川様にて出
合しに。手に余り取逃せしと。只今殿へ加勢の願ひ。ミ其伝七とやらは。逃ましたかへ。
ミ女房何を差出る。ぶよふ逃たじやござりませんかいな。今の誓を忘れたか。ミ矢五兵衛殿
御内意はな。ミ。九嶋家への聞へも有ば。右伝七を捕人の役目。貴殿へ仰付らるゝと。

聞女房が気はそゞろ。頼の先を御上意に吐胸。ついたる物案じ。とはしらぬ郷左衛門。ミ畏り
奉る。そやつ何程の手者にもせよ。時を移さず召捕て役義の手始。ミ、申其義

42才

をお請なされては。又差出る不作法者。ミそれでも。さだまりおらふ。ミ伝七が人相はな。年
の比三十斗。中肉にして色白く。着用は黒羽三重。目当は茶の実の紋所。ミ女の姿は。

ミ、慥紫紅紫の門戸づま。見るから端手なけんたんだとき。ミ、成程承知仕る。ちと心
当りの義もござれば。当人共にくし上既に御前へ差上ませふ。ミ、いさましい。お請の
様子。言上致そふ。御使者御苦勞。おさらばと。義理にしがらむ取縄の終りを人
や白刃に。式台してぞかへしける。郷左衛門は主恩の。報ずるはしと煙草盆。工
夫の友に吹けふり。思ひは内に有なから。いはれぬ大事女房かしん気。辛

42ウ

苦の間にも。ちゞの思ひに引こもり。苦しむ母が胸の闇。開く障子

のかみにだに。頼むかひなき老病の足元。弱々立出る。ミ、御用有ば

お召なされいで。ミ女房。お気を付よといはる詞。ミ、過分にござる。郷左衛門。お使
者の趣御前の首尾。あれから聞たが目出たい。けふよりは一郡を取捌くそ

なた故。此母が願ひが有。取上て下さるか。是は又お詞共覚へず。ミ何事

成共。ミ嫁女の誓。ミ内縁の依怙をせぬそなたの潔白忠義の魂。

「レ感じました。其心を忘れぬ様。此場を直に役所になぞらへ。誠の捌きが
43才

見とふござるご子に教る母のお望。いか様共。レ嬉しうござるそんなら席を改て
と。たと庭へおり立は。キ申。御病体の御身にて。それは人参り。レてく。
中依怙ひいきは不忠に成ぞや。キ御尤。何事成共キ、仰下されい。わらは
が願ひは此書付と椽側に差置は。詞に括て表向取上て読訴状。

母の願ひはいかゞぞと。氣遣ふ嫁が。胸どきレ此願ひは。拙者めを
御勘当。キ継子の縁を切たいとな。キ尤久離勘当。但有願ひといひ
ながら。親としては慈にとゞまり。子としては孝にとゞまる。恩愛の道断
43ウ

切とは重い事。一応も再応も。利害をといて取上ぬと。キ申まするが
捌きの表。併其継子が不行跡御意に叶はぬ故の事かな。キのふ。廿四
孝も及はぬ孝行。余り親を太切に。思ふてくれる故の勘当。縁
を切て此母を。元の乳母よと呼で下され。キ又なせな。されば願ひ
は恩と義理。産の我子が大それた。科を犯せしお尋者。義理の有継
子へは。召捕と有主人の仰。捕ゆれば母の歎き。見赦せば御意を背く。
忠と孝との苦しみかける。因果な母が総の糸。もつれに物を思はずか
44才

と。思へば身も世もあられぬ悲しさ。勘当すればあかの他人。其他人の子の
伝七。義理も遠慮も有まいかの。キそれ故の此願ひ取上て下されと千
万無量の数レを一紙に込し。願ひ書。キ十木伝七とは。母の古郷に残さ
れし。御実子にて有たよな。キ。はつと斗郷左衛門。忠孝二つの判断に心ま
よふて。詞なし。お浪も母の志忝涙諸共に。キお聞なされたか。常からの
お慈悲心。斯なる事が悲しさに。詞返して申たが。明ていはれぬ入訳を。
推量して下さんせ。恩愛実のお子を捨。お前に手柄がさせたいと。
44ウ

義理にせまりし母様の。心の内がおいとしい。キのふ嫁女の気扱ひ。嬉しいは
嬉しいか。悪事をなして此母迄。奈落へおとす不孝な子と。孝行深い
義理有子を。何のレ見かへてよい物そいの。見付次第に擲取。お主へ忠義を
立てたも所詮。此身は日数有膈の病の臨終に。せめて正念往生の

障りない間に死たいといとレ苦しき老病の。母の情に郷左衛門。有難涙■
五臓よりしほり出すか。如くにて暫らく。包かねけるが。心を定め郷左衛門
仰に従ひ御主人へ。忠義を励むが則孝行。とは云ながら稚きより。大恩
45才

受し母人に。勘当受る拙者が心。さいのふ。孝行な子を勘当する。母が心
も推量して。成程承知仕る。侍ならずばともかうも。思慮分別も有べき
に。母人。郷左衛門。御赦されて下されい。御勘当受る上は。キ女房。最前持せし。
キ其箱。中なる品は帰り道。不思議に指ひし女のはれ着。離縁の印母

人へ。心斗の送り物。是斗は差出ても苦しかるまい。よふ合点して。計らへと明ていはれぬ玉手箱。口と心は浦嶋の。お浪に寄て奥に入。跡に女

房は。詞の端もいぶかしながら。母諸共に上り椽つながら中と白木の

45ウ

箱。開けば内は。さとなたは。こお恥かしうござりますと顔を隠せばと
最前聞た衣装の模様は。高雄様じやの。さく左様でござります。追人に
出合伝七様と。離れくに成た身を。頼むに引ぬお情で。思はず来る此お
屋敷。義理とくのお歎きを。聞ば聞程あの中で。泣て斗おりましたとひ
たす袂を母親は。取て引寄身をふるはし。と高雄とやら。と伝七は何所にゐる。

和子の手柄にせにやならぬ。きくく有家をいやと。義を立てつもの詞もおろ

く声。き申。伝七様は夕部から。さくくしらぬといふて済物かいやい。人を殺して

46才

逃隠れ。いつ迄天の赦しが有ふ。名もなき者に捕れふより。と仁義有

郷左衛門の手にかゝるがまだしも本望。きいへ。いはぬか。きく。き。と気をせき

上る母親の。病もいとはぬ身のくるしみ。傍にお浪も見くるしき。

と申お袋様。離縁の印と連合の。今の詞はうら表。助ける心に違は

ない。余りのお心遣ひ。病ひの障りが猶悲しいと撫つさすつ介抱に。

さく郷左衛門の情より。仏間にござる親御達の。位牌へどふも済ませ

ぬはいのふ。きくく高雄。伝七が有家をいやき。く。きくおさげしきは御尤じや

46ウ

が。斯いふ事を聞てなら。何の比怯に逃隠れ。名乗て出る気もお主の

大事。宝の詮義に。死れぬ命せめて私をかはりに立。義理有中の

お手柄に。どふぞなされて下さりませ。たとへ此身は刻まれても初めて

逢た母様のお気を休める孝行の種に死だと聞てなら。伝七様に出かし

たと誉られるのがわしや嬉しい。お願ひ申上ますと。捨る我身の真

実に拜んで廻るつらさより。外には母の屋敷ぞと。窺ふ裏門伝七

が。出るに知られぬ忠義のかせ。出かした高雄。我かはりに。命を捨よといふ

47才

声も。隔憚る奥の間に。郷左衛門は女房へ助けかへせに気扱ひ。三方四方にいな

がる義心。きくく。縄かけて下さりませ。さくお前を助けねば夫の心が無足に成。と夫

では詞が立ぬ。其お詞を立るのは私が自害と用意の剃刀。取直す手に

絶る浪。是非にと有は私か死る。と私が。と私が。くとばい合二人が手を取て

と達てといへばそなたも死るか。こなたも死ぬか。と忝い嫁女達。気強ふ

いふも侍の。母に生れた身の因果。産出した我子じや物。心の中は助たい。

くくの闇に迷ふてゐるはいのとわつと涙の一時雨。かゝる二人か口説言。ほんに

47ウ

世界の譬にも泣寄とやらいふ物を。一人は科人お一人は。捕人の役を受るとは

どふした縁でござりませふ。さればいなと高雄様。此騒動かないならば一家一門打寄

て。お袋様の御介抱。心置なふせう物を。とこれ申其お歎きを聞に付。思はぬ不孝も伝七様。嘸や悔んで居られませふ。お赦しなされて下さりませ。と、其侘言は此母が我強ふいふたも義理の杖。助るも義理死るも義理浮世の義理か敵にて親子三人嫁姑。かゝる思ひをさするかととけ合涙内外も俱に流るゝ谷の。流れは一つ川筋へ漲り。落し如くなり。思案極めし門の外。伝七是

48才

にと入んとす襖に主が。ささく。名乗て出るは死人同前。懐に入窮鳥を押へ捕へて手柄にする。郷左衛門と思ふかやい。明方近き月かけを。埒離るゝ時刻と心得。可愛くと泣も理り。親鳥の心休め。夜明ぬ内に飛たかよい。と外へ聞する。

情の詞。きく郷左衛門様。縄かけて下さりませ。と女。と聞へた。夫に離れし狂人じやな。氣違ひならば是には叶はぬ。早く行と引立て。突出す裏門血

脈の縁。母人様。不孝の段々。御赦されてと云つゝ見合す親子の別れ

立切。戸口。郷左衛門。何にもいはぬ忝いと。我子を拝む母親の。嬉し涙の

48ウ

氣をくんで傍にも余る涙なり。早東雲と鳴鐘を。相図に入来る捕

人の人数。下知をいかゝと扣る門内。き時刻違へず太義く。用意する内扣へて居よ。と女房。母人を御寝間へと泣入母親をいたはり奥へ。外面に

は見送る影も薄明りしやうじは。末の哀れなり。と小頭。手配をせふ

わい。き近ふこい。と斯胴勢が往来せば。返つて風をくらふ道理。此人数を

二手に分。小助九人は一手をつれて。城下の出口。みさ崎の森。其先は、何とやら。

と。浜辺の方は。高浜より猿鳴犬鳴。其辺には兼て手当がござります。と。

49才

と浜辺は。手当が有とな。身は須磨のうらづたひ。和田が崎より。湊川の

流れに添て落合なば。唐天竺へも行は跡。一の谷より山田へ。此道筋は氣遣ひ有まい。本街道を吟味せんと。下知する詞は裏門へ。教へて出る表の方。

内にはお浪が声を上のお悲しや母様の御自害と。いふに驚く西東。かけ

戻らんとする氣ざし。それと悟つて今端の母。さ未練な子供ら。寿命で死る

膈病。警非業の死て有ふが。母にお主を見返るか。励ます詞は其俣に・御遺

言ぞと氣もよはの空。ほのくと明石瀉霧に紛れて出て行すへは。心の【三重】廻りあふ

49ウ

六冊目 道行かよふ千鳥

あへばく口舌が。つい積の種。逢ぬ。つらさにさし込瘡。閨の隙さへ。つれなき物と。

其言の葉も。なつかしく。思ひ菊地の亀次郎。かたみに浮む七浦と。連立

旅の長崎を出こす夜半の下の闇。我故ひそむ伝七が。落付先と思

ひ立。心の。内こそ。たづきなき俱にしどなき。道もせの往来指さすとり

なりに。顔も上氣の厚狭市。と三田尻目づかひ迄。得も岩国と名にしあふ。

彼錦帯の橋桂雲路にかけて及びなき身の徒のうき曇り晴させ

50才

給へと塵手水。ぬさ取あへぬ敵嶋。世を広嶋の女夫合。吸付煙草付
ざしに。曲輪の格子中戸口。おろせ禿に相図させ。忍び逃た事思ひ出
す。三原尾の道神辺より松山越の別れ坂。其憂ふしを道草に。露
と寝る夜は。久しい物の。秋の夕暮物思ひ顔。さく月のかげ。下行
水が憎てらし。色を。寝る夜は。つい起安き。春曙枕。さく

朝日かけ。顔にさすのが恥しい身の徒を忘れ草。見付たと崑
崑(ぼ)が。いづくに忍び居たりけん。引搦んだる黒ちよつかい。こと斗に詮方も
50ウ

驚く二人がうき事の。道におくれし奴の時介。腕首取て脛蹴返し。引くり
返す大の字形。あをぎ立たる安堵の人々。さ穢らはしい畜生め。見へかくれ
のお供は拙者め。爰構はずとお先へ。合点とかけり行。二人をやらじと
追ゆる黒す。又そばへるかと思のころ投。儕奴め鶏料理。しめてく

れんと組付を。腕はかされてじりりマイ舞野辺の錦に立迷ふ。かね付とんぼう中返り。
ぱんやのごとく打のめされ。葉はぬと逃出すを。捕へる手先ずる。すべる黒すが身
の油。拔足早き帆柱飛。とぶが如くに欠行を。遁さぬ時介根限り。跡を慕て追て行

51オ

限り有身のかきりをしらで。何の因果にしやばに来て。生て添る身
ではなし。同じ道もせとくよりも。行こす高雄伝七か。時雨や下陰に。

しばし休らふ笠やどり。待しやんせ伝七様。とふ有ても私を捨。名
乗て出る気でごさんすかへ。聞分ない未練な高尾。殿の御先途見
届け次第。おそかれとかれ遁れぬ命。是迄段々情有郷左衛門殿の手

で縄かゝる此伝七。跡に残つて香花取。吊ふはそちが役。かならず頼むと弱
る氣を。見せぬ日頃のもきどふは。泣よりつらき思ひなり。高尾は夫の

51ウ

顔打守り。夫はあんまり胸欲なり、聞へぬわいな伝七様。夜のくいな
の。戸をたき。軒吹風の音づれも。待にはつらき。男氣の迷ふ来ながら
誤らす。強いせりふに夜をあかし。おし明方の中なをり。逢ぬつらさのしん
ぼうを。一つに寄た肌と肌。放れとむない放さぬと云つ云れつ此髪。

乱れすがたもいとひなく。お前を思ふ私をば。跡に残して死ふとはそりやあん
まりな胸欲と。色にあふてはそれ者でも。まぶな涙や。こぼすらん、くどき
立られ伝七が。強き心も引さる。国の妻子に重ね妻。重る思ひかさ

52オ

なる捕手。やお尋の伝七高尾腕を廻せと取かこめば。高雄をかしこへ忍は
す間もなく。一このかけ声。村々見ゆる秋草の上に置露踏あらし。荒
野の鷹の追鳥狩。一度に寄を夢枕体術柔の虚々実々ひる

まず付入多勢に無勢。もてあましたる拔刀。上段下段に切まくら
れにげ行捕手を追捨て。きおじや高雄。と伝七か。恋の重荷の。

夫かい道いつく。定めぬ【三重】浮身かな

七冊目

かゝるつらさを。夢現心通へる千鳥かな。須磨の関所の軒端の雪。腰
52ウ

縄打れとらはれのおりくは夫伝七か。名を出さじと思ひ込。勞れねむりの。
やるせなき。哀れをしらぬ下部がわれ竹。ニヤ寝をるな女。目をさませと。
たゞき立たるとつてう声。耳に恟り目をほつちり。ヒミ我夫と。思はず
立て爰かしこ尋ね廻りを引すへられ漸心を押しつめ。ほんに夢で
有たかい。所はとことしらね共。足弱づれの道中で取巻れたる夫の働
き。いふに云れぬあやうい場所。さめては元の須磨の関。そんならわしが程
遠く。行越たのを仏神のお告に見せて下されしか。夫が爰なら嘸や嘸

53才

うき艱難はいか斗と。我身の上のつらさより。夫の越かた一筋に思
ひ。やる方泣しづむ。関を預る印南の家中唐津軍作。麻上
下に大小もいかつがましく。火鉢にかゝり。今朝通りし道者の中。切手も持
ずまぎれ込。関所をたばかり通らんとするのふとい女め。引とらへて国所
吟味すれ共有論な詞。明白にぬかさねば火水の責でも白状
さす。太切な詮義の内居ねふる程の大胆者。ミ打すへいぶちのめ
せと。下知に用捨もあわしこ共。むかせくと破竹に。骨も裂るゝ

53ウ

憂苦しみ。地獄の呵責まのあたり。目も当られぬ風情なり。かゝる折
から雪踏ちらして宇根山段治。状箱携へかけ来り。伴右衛門様の急
御状。御披見有とさし出せば。ヤ家来段治太義。暫時も早
くと封おし切。とつくと読で心にうなづき。寸者共追付相役郷左衛門
も来られん。立合の上女が詮義。次に引すへ置べしと。下部にいひ付
引立させ。軍作は小声になり。九嶋の家中。伴右衛門とは従弟の某。長
崎表で手に入たる彼香炉。先達て此方へ送られしを。人しれず

54才

かくし置某。もしやけどつて菊地が余類入込まい物なす。心を付
よとひそかの五体。其上配符の廻つたる伝七め。此関所で召捕は
小溝の口へいかきを当。鯨を取より安けれ共。伴右が心をかけられし傾
城高尾。ともに獄屋へ引すも殺生。ヤ夫にこそ屈竟一。兼て
身共が頼み置。板宿のわる者共。街道筋に待受て伝七と見るな
らば。喧嘩に事寄連たる女をばい取せ。うろたへさせてきやつ一人此関
所で召捕手段。斯の通りと吹ならず。相図の笛の。音によるは。しか

54ウ

も名うての馬士共。ヤ、豕の仁蔵。まちな辰。がんつの岩太義。ヤ、頼
で置た彼手つがひ親方氣遣ひさんすな。夫をぬかつてよい物か。
何でも其高尾めを引かける工面でごんす。が聞きや其幻妻と

は道で別れ。亀次郎といふ二才めを葛籠に入れて伝七か。此上方へ来るとの沙汰。十亀次郎を葛籠に入れて伝七が此辺へ来るとな。ム、よし。お尋者の伝七めきやつ召捕は手柄と云。高尾をせめる媒鳥に成ヒギ必。ぬかるな。仕課せたら褒美は即座に引がへと。奸計深き軍

55才

作が。詞に乗出す三人は。札幌の方へ主従が。胸の劔先時計の八つ。番所に段治居かはらせ。次の一間へ立て入。其間も絶ぬ。旅人の。春から夏見の商人が。冬季も厭はぬ雪空に。さきがける気の浪花より。宮内へ通る者。切手改め下されよと。断いふて行道へ。日向を立て伊勢参り物語。らねど菅笠を脱で見せたる手形紙。ちりけを見せて打通る。其外遊山旅芝居。出家侍百性大工。順礼四国に至る迄往来の切手改める実西。国の咽首なり。程なく入来る行義鮫ひたも和田知の門左衛門。雪に蛇の目の傘足

55ウ

駄装束合羽青漆の。供人連たる跡よりも。問屋の行司這蹲ひ。こゝ只今申上ます通り。四五日跡にお飛脚が忘置て行れました。上杉様の此差駅符。お開所へ上ませうや。組問屋に置ませうや。お届申上ますと。窺ふ内に駅符手に取。ム、委細慥に聞届た。先規の通り駅符は関所に留置ん。帰れと追かへし。しづく通る関所の内。御苦労也と出向ふ段治。門左衛門取敢ず。軍作殿の休息がはり。寒気の砌御太義千万。自分も奥でお目にかゝらふ。家来は勝手へ寸段治殿。往来とだへし此大雪暫く戸ざして休まれよと。指図に任せ東西の。木戸を下部にかためさせ伴ひ

56才

てこそ入にける。氷柱もすき間なく小止もやらぬ雪道を。かわらでたどる。人もうし。むざんや稚子の。姉に連立弟は。まだいわけなき五つ子の引る。手さへこふり付。道のたつきは杖斗。一つの笠を姉弟が身につむ雪の。ふるごさをまとふて。しのぐ子心も。関所の前に。イみて。きのふの道から此須磨に。関所とやらが有さかいで。切手がなふては通られぬと。聞て居ながら大雪で。そなたの笠は風に取れる。わしが此笠ばかりで。漸爰迄来たもの。切手がなふては通られまい。

56ウ

身を切様な此風吹。嘸かし寒ふて成まいのふ。ム。ぼんは強いによつて。寒い事はないけれど。早ふかゝ様に逢てから。抱れて乳が呑たいと。喰しばつたるおろく涙。ム、道理じやく逢たかる。わしも逢たふ思ふ故。何所をしやうどくしらね共。尋ね廻るにかゝ様は。どふして居さんす事じややら。五つも六つも年かさの。わしさへつらい雪の旅。わがみがこゝへて死ふかと。それが悲しい情ない。ムかゝ様に逢迄は。わしや死はせぬけれど。てゝと足を切様な。火燵をかふてあてゝやと。せがまるゝ身もそげ立て。声さへ氷る憂

57才

涙哀れ見る目もいたし。血脉に。ひゞく。八つ半時。片時も忘れぬつま

子の行衛。思ひくづおれ番人の隙を。忍んで抜出るおりく。人なき
内に此関を。落んず物と上方の。出口へばつたり錠おりたり。なむ三
宝此門は明石の方の下部へと。出かゝるこなたもしめ切門と。やせん
かくや越方を。見やる外面は白妙の。降積雪にうづもるゝ。二人の姿
よそ目にも。可愛や稚い二人つれ。此大雪に道ばかも。さぞかし
寒ふてなりやせまい。是に付ても思ひ出す。国に残せし兄

57ウ

弟の。子供によふ似た佛と。見ればまがひも泣入我子。さそなた
はお松か。礮吉でないかいの。ほんにかゝ様嬉しや爰に居てかいのと。寒
さつめたさ打忘れかけよる木戸の透間より。姿あらはに見へければ
はかゝ様抱て下され乳呑たい。ちやつと明てと八寒の。地獄のくけん
すくはるゝ姉諸共に嬉し顔。母はあこがれ正体なく。可可愛やなあ。自
由に爰が明ふなら。わしに如才はなけれ共。科人と成此身をば。逃すま
いとてしめ切た。此門一重が親子のかせ。肌身にそへて乳を含め。こゝへた

58オ

手をもぬくめたい。可愛の姉や弟が。此大雪をひらうてに。冷こゝへるを
身殺すか。可愛やくせめて是をと帯ぐるゝとて脱たる上着をば。

外へひらりと兄弟の。深雪を防ぐ母の衣ほると。涙の姉お松。前薄着して。風引て下さんすな。孝行な事よふいやつた。何の風引事

じやない。二人の背へ打かけて。早ふ雪を払ふてたも。そこ明て下されにや。
べゝ着やせぬとぐはんぜんなき。稚心ぞ不便なる。涙ぬぐふてはお松。
人をあやめて上方へ。立退た伝七殿。広い世界によるべなふ。心労辛

58ウ

苦さしやんする。其成行が案じられ。跡をしたふは女子の操そなた衆二
人は氣を知た。乳母が所へ何もかも。預けて頼んで置たのに。跡を追て其
難義。姉がすゝめて来たのじやの。姉様に此ぼんが。せがんでつれて来て
貰ふた。それも乳母が死んだによつて。さ何乳母は死にやつたか。卒中と
やらいふ病ひで。跡の月乳母は頓死。それから一家とやらが来て。何もかも持
て行。あの子とわしは追出され。行所がない故に。かゝ様よべとせがみは仕
やる。お前を尋ねに国を出て。あそこや爰て錢貰ふたり。泊らして

59オ

貰ふたり。ぼんのせがんで無理いふて。泣やる時には仕様もなふ。肌着と餅をかへ
事し。人に貰ふた手の内で一日くらす星明り。小倉とやらの船頭衆の情
て越た船着の。肥前へ来たのは先一昨日。連てうろつく形を見て。小盗人
じやと山際へ。擲き出された時也有。慈悲な百姓村の衆の。庭で
寝さして下されば。昼のむすびをお家様が。くれて明石の出口から。けふ
降雪のまがひ道。行つ戻りつ便りなき。此子力のわしが氣を。かゝ様思ひ
やらしやんせと。子供咄しの跡や先。聞親の身は死入斗。もふいふてたもんな

く。扱も苦勞を仕やつたのふ。さこれ此母が居るからは。といふてわしもとらわれの。通れん方も情なや。何の因果か報ひかと悔泣入。斗なり。旅の勞に稚子の。雪吹になやむ身の苦しみ。姉は驚き。さく磯吉。何と仕やつた。どふ仕たそいの。姉様腹が痛いわいの。かゝ様ちやつと爰へ来て。どふぞなをして下されと。いふ唇も紫立。のつつ反つの身もだへに。お松はうるゝ母は猶此冷るのに一日。雪の中にまぶれて居る。余尺もない其體。病ひが出いで何とせふ。どふぞ肌をあたゝめてと。思へは詮方泣入子の。声聞せしとそゞろの氣60ゝ63才

もせ。有合火鉢心付。天のあたへと取おろし。関の戸隔あおぎ立あおぎ。立ればおこる火のじやうより白く降雪を火もて消つゝ身を震ひ。さお松磯がおなかを此扉へ。ひつたりと付て居や。さく姉も雪ふせく我身。おしまぬ介抱に。痛やはらく我子の顔戸の透間より打守り。さぼんちつとよいか。顔の色見なをした。さく嬉しやく長崎に居やらふなら。人參よ一角と。手近き薬も有ものを。そなた衆二人がうろ付て難義仕やるを見るに付。此身の憂は何所へやら。ふり重つた我思ひ。関の戸よりもふさがつて。苦しいつらい胸の戸60ゝ63ウ

の。いたややるせがないわいのと。夫と我子に身をおしませ。口説涙の幾しきり。須磨の浦波打かへし。国をあらそふ雪の浜ともに泣音の。磯千鳥哀れ。かきりはなかりけり。いつの間にかは軍作主従。蚤取眼に聞耳立。扱こそあやつ十木が女房。拔出よふとは不敵なめらうめ。

それ引すへよ者共と。呼はる内外隠れる子供。母は遁れぬ網代の氷魚。どしめき渡つて開く木戸。喧嘩くと問屋の太鼓。俱になり込

馬士共。き切ましたく。まつ此通りと血みどろちんがい。辰が死骸を戸板に64才

乗。昇庭庭先手筈の段治。さ此相人は何者じや。さ喧嘩の相人はお七里飛脚。さく爰へといふ間もなく飛脚に出立伝七が。葛籠に主人を忍ばせて。背にしつかと抜刀。おだやむ雪の土手づたひのさく。歩む後の方。大勢囲む棒ちぎり木。さく狼藉な所のやつら。御荷物預かる飛脚にたいし。手向ひろぐ棒の先。ちく共あたれば撫切と関所へ通る大胆不敵。さとかけたる軍作が。詞に段治が取かゝる。十木かはして肩先取。ひねればがつくり横なぐれ。さ手向ひと侍共追取囲むを奥の間より。さ暫らくと64ウ

郷左衛門襖開いて歩み出。たとへ諸候の飛脚たり共。鎌倉の御下知にて。かためたる此関所。抜刀せし狼藉者。改めて詮義せん。所の者は引取と座を定ればはつと斗。刀を納め荷物をおろし。拙者全く狼藉は仕らず。上杉殿の急用の此葛籠。一の谷より兵庫迄。五百文相對いたし。立場にて替馬せんと。酒代の望は金百両。渡さねば荷物をば。預かるなどゝね

だりかけ。徒党をからたひ難題無体。太切の御荷物。凶事でも有
か紛失せば。首と胴との生別れ。是非に及ばぬ口論喧嘩。相人は

65才

大勢身共は一人。抛なき此時宜と。言上見上る役人の顔は因の郷左衛門。
是はと斗伝七と。しらず顔なる志。庭にはち入思ひかや。がんつの岩が
片手を突。こゝ申上ます。今の様にいはれては。ちとが悪い様なれど。
ご荷物には人肌がいたします。怪しい物はお関所で。お改が有程に。役
人衆へいはふといふた。それを咎とて此様に大袈裟切。命はたとへ取留
ても。一生片手ぶらり三。ご。利腕がいもなつて。馬追事か成ません。

ご、おれも天窓をさくろの様に打破れ。まぢんの辰はあの様に。急所をつかれ
65ウ

てごねましたと。付つ添つに両方から。悪風吹かけ眼もくらみ。前
後をぼうずる斗なり。始終手を組郷左衛門。軍作は一はな立。それ荷物
から改よ。承はると段治と仁蔵。目を見合して立かゝる。首筋取て引
ずり退。はり退蹴退打倒し。荷物にどつかと腰打かけ。上杉殿のお
納戸御用。御前の夜着はぱんやの中入。ぱんやの徳には人肌する。それかな詰つ
て有ふとは。推量すれ共封を切。改させては此飛脚が命づく。指でも
さへてお見やれと。夫の声の引ばなし。おりくは恟りやるせなく。毒

66才

蛇の口へ来事はと。思はずしらず立寄顔。さそなたはといひさして。跡は詞も
伝七が。顔は見ながらそれぞ共いはぬ色目はくちなし染。軍作はしたり顔。
き是从が詮義の要。最前ちらと見た小悴。女のがきもかゞんでおらふ。
段治捜せといふ間もなく。引きげ出てかしこへ投すへ。ご此飛脚はわいら
らが親伝七で有ふがなと。いふに子供が弁へなく。さゝ様と姉弟が。立
寄中を隔るおりく。ご何いやる。ありやとゝ様ではないわいのふ。それでも。
ご是伝七殿じやない。わがみのいやるとゝ様の。伝七殿が爰へ出りや。

66ウ

あの殿様に縛られる。ごお尋の日陰者。けふやお上へ召捕れ。明日や憂
目に逢てかと連添人の身の難義。案じぬ間とてはないわいの。それ
故急に思ひ立。夫の行衛尋ふかと。はかない女の旅の空。関やぶり
とて捕へられ。思はず爰で無事な顔。き伝七殿によふ似て有。お前を
子供がとゝ様といふた筈。女房のわしさへ見違へる。よふ似たお人と。何気
なふ。口と心の晴くもり雨夜の星の朧さよ。ご聞ば聞程笑止な咄し。
しかし其伝七殿が。こな様達の事も思はず。始からお尋者と成気でも

67才

有まいが。定めて恩有お主の為。忠義一途に御前途を。金輪際見届
ける心で。影を隠して居られふ。ご程に。必恨んで進ぜぬがよいわいのと。底
意を余所にいひなせど。涙は余所にもらされぬ。我故かゝる妻や子の。

おれが取さへては。そりやこそ実は我子故と。また此上に疑ひが。かゝるまい物でもない。そこを思へば有がたい。他人の飛脚が。構はぬ事と。我子の命付出して。忠義に通るゝ伝七が。くひしばる齒も一時にわるゝ斗の思ひ成。ゝ成程。ゝあかの他人の。お前さへ気の毒がつて下さんすに。伝七殿が居てならば。現在我子の此有様名乗て出ても。助けたかるふが忠義の為と。じつところらへてござらふかと。隔て居ても。胸の苦しさせつな
70才

さが。思ひやらるゝと泣つくし泣つくしても尽しなき恩愛。深き涙声。人の歎きは何共なく。ハ、くずくとしめう念な罪人共。き伝七で有ふがな。さ我親で有ふがなと。倍にかゝつて打すへる。むねに刃鉄を誰付ておしや■の冬牡丹枯るを待す。散て行。わつと斗に母と姉。是のふ磯吉ゝやゝい。磯吉のふ。磯吉やゝい。伝七殿に似たお人。磯吉は死にました。こりや何とせふどふせふと。余りの事にうろく。途方失ふ伝七が。胸を鑪鞆に踏るゝ思ひ涙隠せばおのづから。まぶたに滾る沖津浪女浪をさそふ風あれて
70ウ

岩に砕くることくなり。猶もつけ込厄病神。辰が解死人取しやつてと。わなれど構はぬ郷左衛門。寸お飛脚。いふ迄には及ばね共。放し討には法有物。五ヶ所のとゞめとつくりと。嘸留られたでござらふのふ。御尤のお尋。心ぜき故そこ。とゞめもさゝぬ此死骸。捨置れずと抜刀。立寄伝七のふ悲しや。ヒヤ叶はぬと逃出すまちん。扱こそ曲者通さじと。おいやる気色に二人共。へちをまくつて辰が跡。上方道へ皆ちり。軍作むくつて膝つゝかけ。お尋の伝七と。きやつを見出して引
71才

よせた馬士共。彼等を無法に取捌き。科人の肩持るゝ。郷左衛門殿の所存はなど。不審立ればちつ共騒がす。上杉殿は鎌倉の執事職。それ故ゆりたる七里の飛脚。慮外せば切捨の御定法そむかぬは掟の一つ。でも疑はしいあの荷物と。寄をやらじと引のくる。十木にかゝる軍作かはずと抜たる腰刀。かはして払へば取落す。白刃拾ふて刃向にかまへ。最前もいふ通り改めさせてはこつちは首がけ。どいつこいつの用捨はない。手なみを見せふか。お役人とよはみ
71ウ

をくはぬ詰ひらき。ミ、連。お飛脚に相違ない郷左衛門がゆるし申た通り召れい。ハ、いつか赦さぬ。此軍作が役目が済ぬ。と左程役前たゞされる其元が。科人詮義のおとり共成べき忪を。なぜお手にかへられた。さそれは。其上重役承はる身共を差置。横目の貴殿が出過た采配。殊に先刻馬士共。貴殿の頼とぬかしたは。何を彼等に頼れたぞ。さ関所を預かる役人が。往來を妨げて大金をゆすり取。彼等と肌を合されても苦しうないか。ハ、其義は。キ。く。く。どぶでいぐる

72才

と理の当然。いひまくられて言句もなく。頼まつかに主従が。しよげる不形は生魚の。中に交つた名古や鱈。ふくれかへるぞ心地よき。よしなき事にお飛脚の。足を留しも配符の裏。科人のあの忤。死たれば

こそ其元の。疑ひはれし。孝行に母が罪科をゆるすも追善。逆大それた関破り。逆磔のお仕置に。キ、関所を破らば逆磔。破らせず

とどめし故。役人に誤りなく。女に科はないといふ物。とそれなら親子は此方へ。身が預つてお尋者の。ハ、伝七詮義は関所の重役。忤が死骸

72ウ

諸共に。母と娘は私宅へ人質。はていらざるお世話やるなど。出ると打込関所の乱杭。くひの八千度くりかへし。返すもお志。役目の指図私には及ばぬ。早お行きやれと郷左衛門。背負す荷物のかろからぬ。御恩と妻子が野送りも。一つ家のよしみ雪の喪服。残念無念と立寄軍作。長押にかけたるやる過し。葛籠へ突込郷左衛門。なむ三宝と十木が気転。片唾をのんだる主従へ。抜取穂先突ければ。と血もしたはぬ此鍵先。扱はと安堵の伝七に。手の内見せたる郷左衛門。お飛脚ござれ。飛がごとくに【三重】かけり行

73才

寒き夜の時の鷹のぬくめ鳥。恩義にせまる十木伝七。須磨より三里戌の刻。一時走りに築嶋寺。門前にイみしが。葛籠おろして一息つき。扱々危い関所の難義よい所に郷左殿が居合されて。鰐の口を遁れたも御運の強きと。云つ、ひらく葛籠の内。おき立出る亀次郎。ハ、嘸御窮屈お気詰りと。介抱すればは打しほれ。此播州には見知た者が多い故。高尾とかはつて荷物に。忍んだけふのひあいさ。おれを見答さすまいと。愛盛りの磯吉迄を。ふそこ所じやござりませぬ。和田知の情で葛籠の縁をぬはれた嬉しさ。一飛に

73ウ

爰迄遁れ参りしも。此築嶋寺の住持は母の兄弟。身共が伯父。何卒頼んでお前を預け。身軽に成て宝の詮義を思ひ立。わざと夜に入参りしが。門をたたくも他聞の恐れ。いかゞはせんとあやぶむ内。付廻したる以前の馬士。荷物の正体見届た。二人共に引く、軍作様へ手渡しと。三人手々に巻ざつば。追取巻ばさそくの伝七。命知ずめ撫切と。ずはと扱たる段平物。手並にこりたる億病風。蜘蛛の子散ず如く也。物音聞付門際の。高堀見こしてによつと出る。顔は見知の。さ時介でないかいの。ハ、珍ら敷若殿様と。声をき、付驚く伝七。何角さし置此門を。ハ、門は開かれず。拙者も申合し

74才

通り。七浦様高雄様お供申て此寺へ。かけ込内にお旦那の内縁有と聞たりしや。役人共が入込で住持を押込門は戸じめ。扱なくお二人は。木部屋にかくし置ました。伝七様はあぶな物。殿様斗此堀から。ハ、合点とてつ取早く元の葛籠に入奉り。雪の大藪足場とし。葛籠を扱せば高堀の。見越を小楯にかひく敷。受取奴が忠義の働き。心安しと伝七が飛おりる間も透さぬ

捕人。又むらゝと取かゝる。腕首咽首呼吸の当身。右往左往に投飛し。迹得やつ原遁さじと。目釘をしめし追かけ行。様子を窺ふ黒装束。

74ウ

忍び頭巾に面を隠し。人なき折を幸と。藪を伝ふて見越の松。堀の内へと。忍び入。内には大勢捕人の声。伝七は裏藪より山手の方へかけ抜しぞ。遁すなやるなど多い声。松明提灯ともしつれ猶山深く追て行。山手は昼と輝けば。何国へ遁れん手詰の伝七。死物狂ひの大わらは。刀も■となる手利の達者。皆白妙の雪の山。血汐に染て切まくる。あまたの捕人もて余し。人溜居にぞ猶予ける。隙を見合せ奴の時介。葛籠を大事と遁るゝ跡。追かけ来る唐津軍作。さ奴めが忠義立。命惜く

75才

ば葛籠を渡せ。さこしやくなと早足の抜打。心得唐津が受流し。爰をせんどゝ戦ふ内。以前の忍びがうかゞひ寄。背おひし葛籠引据れば付込唐津踏飛し。おろす間も奴がとたん。忍びは刀を葛籠へぐつさり。ぎやつと一声血は瀧津瀬。驚く時介そゞろの内。頭巾かなぐり伴右衛門。十太夫は切腹する。若殿を突留たれば誰に恐るゝ者はない。軍作そちに預け置。千鳥の香炉を久吉公へ指上て菊地のあと目は

75ウ

出す香炉。こは口惜と切かくる。其手を直にもんどり打せ。早縄かくれば。伴右衛門。さ跡目なき菊地の族肩持立は腹筋。其跡目は亀次郎殿。早くの声の下。七浦高雄引連て出る亀次郎。さ仰天此内はと。葛籠明れば段治が死骸。あけに成てのたれ伏。さ無念やと切かくるを。奴

が押へて高手小手。亀次郎は安堵の思ひ。郷左衛門の計ひにて。手盛を喰し二人の悪人搦取。香炉再び手に入上は。我に恩有伝七が。身の上いかゞと七浦高雄奴も俱に。あやぶむ内。強気の馬士三人を。なぶり殺しの伝七が。爰に切

76才

捨かしこになぎ伏。郷左衛門が前に座を組。殿の御先途見届し上からは。娑婆に用なき此伝七。召捕給へと廻す手を。取て引立。何事も訴目の館の下知を受。其上の命乞。郷左衛門が家にかへ籠略は有じ。悪人共は獄屋へ下し。帰国あれと。功有捌きに亀次郎。万歳つゞく菊地の跡目。長崎異国の物語り。筆に栄ふる竹本の。節に千歳を寿きて代々に。めで度嘉祝せり